

# 原子力発電問題とどのように向き合うか

## ——社会意識・環境意識の認知空間中における原発の位置づけ——

○東北大学名誉教授 海野道郎 松山大学 小松 洋 山形大学 阿部晃士  
関西学院大学 中野康人 中央大学 篠木幹子

### 1. 目的

東日本大震災以降、国民の多くが脱原発を志向している一方で、原発を基盤エネルギーと位置づけ維持しようとしている現政府を、国民の多数が支持している（ゆえに、現政府が存立している）。どうして、このような＜振れ＞が生じているのだろうか。本報告の目的は、この間に答えるための第一歩として、「人々が抱く社会意識・環境意識の中に原発をめぐる意識がどのように埋め込まれているのか」、という問いに答えることである。

### 2. 方法

生活環境研究会が仙台市環境局の協力の下に 2015 年 11 月に実施した「暮らしと生活環境に関する調査（代表者：松山大学人文学部教授・小松 洋）」のデータを計量分析した。

### 3. 結果

原子力発電所（原発）については、3分の2強の人が「コストは高い」と考え、9割強の人が「絶対安全だとはいえない（危険）」と考えている。この二つの指標をもとに回答者を4類型に構成すると、拒否派（高コストかつ危険）が67%、危惧派（低コストかつ危険）が27%、信頼派（低コストかつ安全）が5%、依存派（高コストかつ安全）は1%であった。

自然観（自然と人間との関係）と科学観（科学と人間との関係）の間にはきわめて低い相関しかないので、それぞれと上記4類型の関係をみると、「拒否派」はもちろん「信頼派」においても、危惧派に比べて「自然と共生」を選ぶ人が多い。また、「拒否派」の中にも、科学に信頼を寄せる人が全回答者とほとんど同じくらいの割合で存在する。逆に「信頼派」の中にも、科学の力に信頼しきれない人が2/3も存在する。

原発の「経済性」と「安全性」は、重回帰分析によって影響を与える説明変数が異なることから、両変数には性格の違いがあることが見いだされる。しかし、社会意識の項目や環境意識の項目とともに因子分析をすると、いずれの場合にでも、「経済性」と「安全性」は、同じ因子に大きな負荷を持つ。社会意識との関係に関しては、原発に対する否定的評価（コスト高い、安全と言えない）は、不公平感（日本社会が不公平であるとの評価）と親和的である一方、回答者の権威主義的態度と独立（別因子）であるだけでなく、社会への信頼とも独立（別因子）である。環境意識との関係に関しては、原発に対する否定的評価は、環境問題解決のための生活不便の許容、環境問題の深刻度認知、天然資源の枯渇に対する不安、環境問題に対する関心などと親和的である。環境問題の原因を行政のルールや指導力、広報、マスコミの情報提供や技術の未熟に帰属させるか否かとは独立（別因子）であり、個人の行動様式に対する評価とも独立（別因子）である。

### 4. 結論と今後の課題

原子力発電所に対する評価を経済性、安全性の2面から測定した。この評価を支えているのは、自然観、科学観だけでなく、公平感に現れている社会への評価であった。今後の調査においては、政治の現状に対する評価と共に、直近の政策（再稼働など）や中長期的政策（新規建設、エネルギー政策）なども含め、現代社会の岐路の一つである原発を巡る議論に筋道を付けたい。